

小沢平および御池のオオハンゴンソウ

堀澤 慶行¹⁾, 宇野 翔太郎¹⁾, 田子 裕輔¹⁾, 大森 威宏²⁾, 黒沢 高秀³⁾

1) 尾瀬保護財団, 2) 群馬県立自然史博物館, 3) 福島大学共生システム理工学類

キーワード

帰化植物 侵略的外来種 生物多様性保全 特定外来種

要旨

近年尾瀬国立公園やその隣接地でオオハンゴンソウが確認されるようになった。福島県側ではこれまでに小沢平（こぞうだいら）と御池駐車場の2箇所を確認されている。小沢平では最初に確認されたのは2017年6月14日で既にその時点で大群生していたとされる。確認された2017年から毎年駆除活動が続けられてきたが、小沢平の駐車場から渋沢温泉小屋跡地を経て尾瀬に至る遊歩道沿いの入口から約150 mにわたり現在でも多数の株が生育している。御池駐車場では、2019年に南側の法面で2または3開花株と多数の栄養株のオオハンゴンソウを確認した。2019年にすべて駆除され、2020年と2021年にはその場所でオオハンゴンソウは確認されなかった。

1. はじめに

尾瀬にはこれまでヒメジョオン、エゾノギシギシなど多くの侵略的外来植物が確認されてきたが、ほとんどの種類は空地や路傍などに生育する植物で、ロッジ周辺やキャンプ場など人為的攪乱の大きい植生に生育が限られてきた。高山帯、湿原、湖沼など尾瀬の重要な植生で外来種が長期的に繁茂することはほとんどなかった。唯一の例外はコカナダモで、1981年に確認されて以降（星 1982, 大須賀・馬場 1982）、一時期衰退したことがあったが、40年にわたって尾瀬沼の一部で優占を続けている。また、オランダガラシ（クレソン）も一時期尾瀬ヶ原下田代丈堀や赤田代タカナ沢で繁茂が確認されたことがあったが（橘他 1978, 馬場・五十嵐 1988, 大須賀 1994）、いずれも駆除されている。尾瀬の重要な植生で外来種が長期的に繁茂することはほとんどなかったのは、尾瀬の人為的な影響が比較的少ないことと、高山の岩礫地、森林、湿原、湖沼などで優占するほど繁茂できる侵略的外来植物が限られることによると思われる。そのため、本州北部の他の高山で繁茂が知られている侵略的外来植物が尾瀬やその周囲で確認された場合は、駆除の優先度が高いものと考えられる。そのような植物として、磐梯山など本州の高山の岩礫地で生育するコウリントンポポと、八幡平などの草地で生育するオオハンゴンソウが挙げられる。コウリントンポポもオオハンゴンソウも幸いなことに尾瀬ではこれまで確認されてこなかった。しかし、近年尾瀬国立公園やその隣接地でもオオハンゴンソウが確認されるようになった。福島県側ではこれまでに小沢平（こぞうだいら）と御池駐車場の2箇所を確認されている。本稿ではこれらの場所でのオオハンゴンソウの状況や駆除活動について報告する。

2. 小沢平のオオハンゴンソウ

国道352号線沿いにある小沢平の駐車場から渋沢温泉小屋跡地を経て尾瀬に至る遊歩道沿いの約150 m

にわたり、オオハンゴンソウが確認されている。この場所は尾瀬国立公園内ではないが、そのすぐ隣接地である。2020年にはa～cの3箇所を確認されている（図1A）。2020年7月11日時点の状況は、一番駐車場に近いa地点では、1 m程度のオオハンゴンソウが全域にわたって他の草本と混在していた。a地点より奥のb地点では、1 m程度のオオハンゴンソウがほぼ一面に繁茂していた。より尾瀬側の遊歩道沿いのc地点では、昨年までにおこなわれた駆除で取り残された根茎から再生した30 cm程度の葉をつけた株が範囲内の全域に点在していた。c地点より尾瀬国立公園側ではオオハンゴンソウは確認されなかった。

2020年7月11日に尾瀬保護財団、尾瀬自然保護ネットワーク、環境省、福島県、桧枝岐村、南会津森林管理支署、尾瀬沼ビジターセンターなどの19名によりオオハンゴンソウの駆除がおこなわれた。駆除方法はスコップや移植ごてにより根茎ごと抜き取るもので、軽トラック1台分が駆除された。後の8月19日時点の状況は、a地点では遊歩道から見て奥側3分の2程度の範囲に開花したオオハンゴンソウが多数（500～1000株程度）繁茂していた。b地点では取り残された根茎から再生した10 cm程度の葉をつけた株がほぼ全面に出現していたほか、開花した株も点在していた（数十株程度）。c地点では取り残された根茎から再生した10 cm程度の葉をつけた株が点在していたが、多くの株は2箇所に集中していた。c地点より尾瀬国立公園側ではオオハンゴンソウは確認されなかった。8月19日にも著者ら4名で1時間ほど駆除活動を行い、c地点で確認された株のすべてと、b地点の開花株のすべて、a地点の開花株の一部を除去した。

2021年8月1日に尾瀬保護財団とボランティアによりオオハンゴンソウの駆除が行われ、軽トラック2台分が駆除された。その後の8月16日時点の状況は、a地点では開花したオオハンゴンソウの開花株が十数株のみで、未開花株はまだ多数生育していた。b地点では開花株はなく、取り残された根茎から再生した20 cm程度以下の葉をつけた株が数百程度出現していた。c地点では実生のような小さなものも含めて50株程度の非開花株が生育していた。8月16日にも著者の1人である黒沢が30分ほど駆除活動を行い、c地点で確認された株のすべてを除去した。

2022年7月30日に尾瀬保護財団とボランティアによりオオハンゴンソウの駆除が行われ、軽トラック2台分が駆除された。その後の8月16日時点の状況は、a地点とb地点では開花株はなく、取り残された根茎から再生した20 cm程度以下の葉をつけた株が、いずれも数百程度出現していた。c地点では開花株1株と実生のような小さなものも含めて18株程度の非開花株が生育していた。8月16日にも著者の1人である黒沢が15分ほど駆除活動を行い、c地点で確認された株のすべてを除去した。

小沢平にオオハンゴンソウが生育していることを尾瀬保護財団が最初に確認したのは2017年6月14日で既にその時点で大群生していたとされる。小沢平駐車場の向かいには開拓地があり、最近まで民家があった（図1B）。この開拓地にはオオハンゴンソウの八重咲きの園芸品種であるハナガサギク（ヤエザキオオハンゴンソウ）が生育していることが確認されており、オオハンゴンソウも鑑賞用に導入されていた可能性がある。現在オオハンゴンソウが繁茂しているa～cの地点はいずれも2010年にも林縁的な環境が広がっており、オオハンゴンソウが侵入しやすい状況が長期間維持されていたようである。現在見られるオオハンゴンソウの株数や集団の広がりなどから、2017年よりかなり以前から生育していた可能性が高いと思われる。

小沢平のオオハンゴンソウは確認された2017年から毎年駆除活動が続けられてきた。2018年7月8日には軽トラック2台分、2019年6月29日には軽トラック1台分が駆除されている。

なお、ハナガサギクは1980年代から1990年代にかけて見晴の山小屋周辺で栽培されていたことがある（馬場・五十嵐 1988, 大須賀 1994）。

2. 御池駐車場のオオハンゴンソウ

御池駐車場では, 著者の1人である大森が2019年に南側の法面で2または3開花株と多数の栄養株のオオハンゴンソウを確認した(図2)。その場で開花株を駆除した。残りの株も, その後ブナの森ミュージアムおよび御池ロッジにより駆除された。2020年, 2021年および2022年にはその場所でオオハンゴンソウは確認されなかった。オオハンゴンソウは埋土種子を形成することが推察されているため(大澤・赤坂2009), 少なくとも数年間は確認を続ける必要があると考えられる。

謝辞

新潟大学教育学部の鈴木朋弘氏に調査や駆除をお手伝いいただいた。お礼申し上げます。

引用文献

- 馬場篤・五十嵐徳三. 1988. 下田代湿原へ侵入した平地性植物. 尾瀬の保護と復元 (18): 49-53.
- 星一彰. 1982. 尾瀬沼にコカナダモ侵入. 水草研究会会報 (7): 1.
- 大須賀昭雄. 1994. 見晴付近の平地性植物の分布状況. 尾瀬の保護と復元 (21): 65-67.
- 大須賀昭雄・馬場篤. 1982. 尾瀬下田代付近に侵入した平地性植物の繁茂状況. 尾瀬の保護と復元 (13): 27-32.
- 橘ヒサ子・檜村利道・樋口利雄. 1978. 尾瀬ヶ原下田代湿原見晴付近におけるヨシの生態調査(第3報). 尾瀬の保護と復元 (9): 1-14.
- 大澤剛士・赤坂宗光. 2009. 特定外来生物オオハンゴンソウの管理方法 引き抜きの有効性の検討. 保全生態学会誌 14: 37-43.

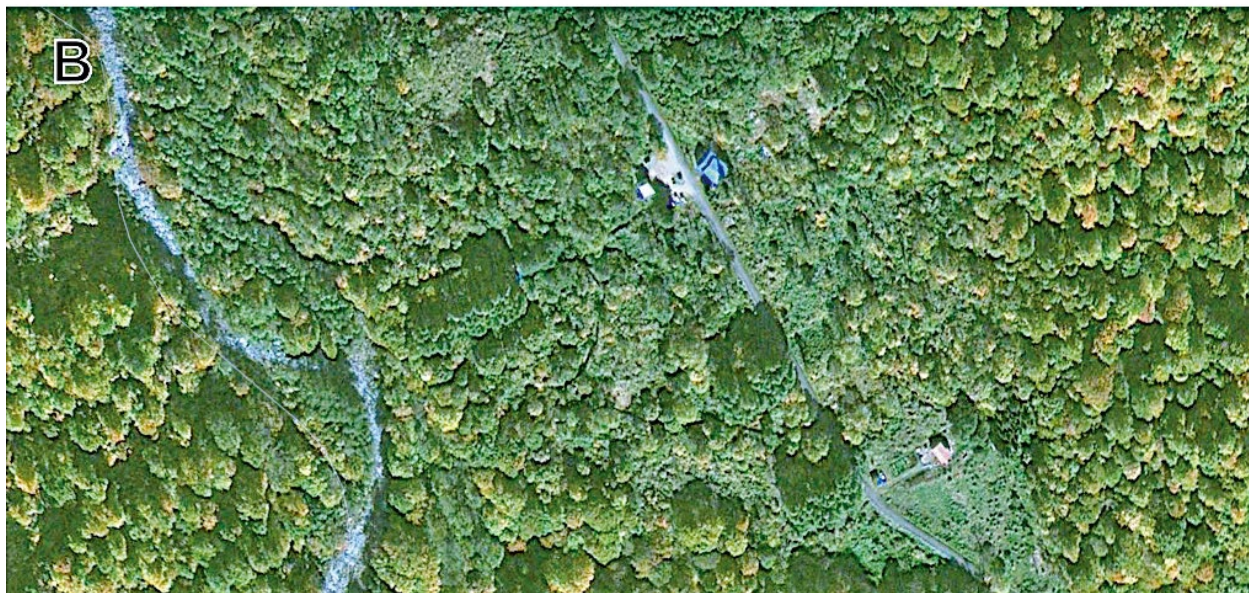
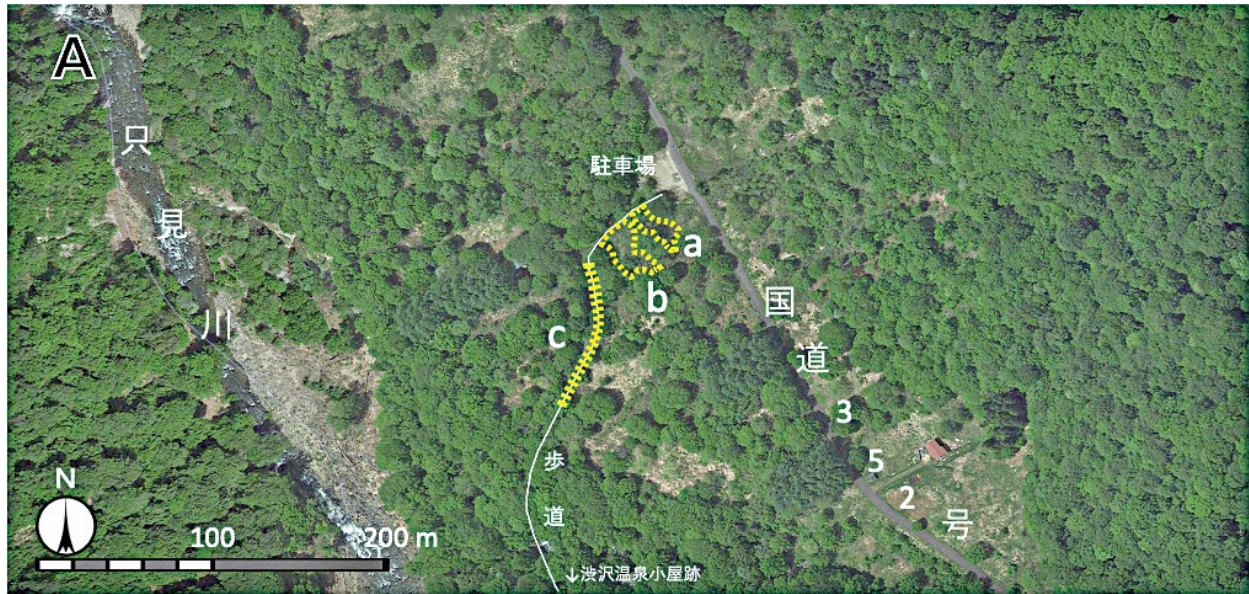


図1. 福島県南会津郡桧枝岐村小沢平のオオハンゴンソウの生育場所.
 A: 2020年8月19日のオオハンゴンソウの生育範囲 (点線の範囲).
 B: 2010年の植生や土地利用の様子.
 衛星写真はGoogle Earthより2020年11月11日ダウンロードしたもの
 (Aは2018年5月25日, Bは2009年10月19日撮影).

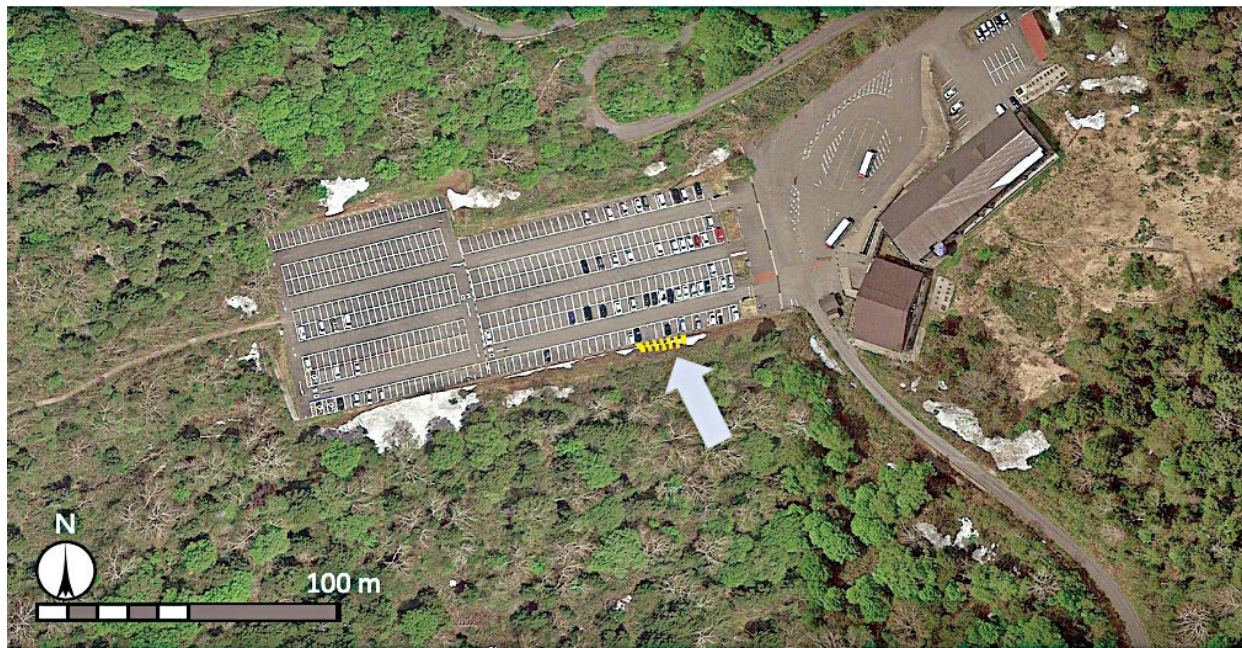


図2. 福島県南会津郡桧枝岐村御池駐車場のオオハンゴンソウの生育場所.
2019年のオオハンゴンソウの生育範囲 (矢印の先, 点線の範囲).
衛星写真はGoogle Earthより2020年11月11日ダウンロードしたもの (2018年5月25日撮影).